

八木義徳日記（横光利一追悼記）

（1947年年12月30日
～ 1948年1月10日）

二
十月三十日(火) 暖

第五回目の「戦争と平和」読みにかかる。
それから真船豊「梅原竜三郎」第四回目読む
この美論は幾度も繰り返し読むべきもの
飯河来訪

すこし話して、銀座に出る。二宮君に会い度いといふので彼のアナ
を三ヶ所廻つてみたがどこにもゐない。仕方ないので、「むら井」で
コーヒーのみ、彼は千束(洗足)泊りにして別れる。

× × ×
夜九時のラジオのニュースの一番最後 横光先生逝去の
報を報ず。こたつに入って戦争と平和読みつゝこの報を
きゝ、悄然として本を投げ出す。何といふニュースだ。ついこない

だ(――^{十八}二十日)松村、阿部の両氏が、横光先生の御病氣
が悪化(原稿を書き上げて書斎の窓をあけようとしてそのまゝ
倒れられた由)して病状の甚だ不安なことを知らせに来てくれた
翌々日、木炭半俵を先生の御宅に持参旁々御見舞に
上つた折(わざと御面会を願はず台勝手口で奥さまだけに
お目にかゝり、昨夜来持ち直してこの分なら安心していゝやうだと奥さ
まの明るい言葉にひとまつ安堵の胸を下して辞去し、その翌々
日(二十三日)それから二十四日と松村氏と連続した時も、漸時
快報に向はれつゝあるといふよいたよりであつたの気をゆるして
お見舞いにも上らずにゐたのだつた。

何故、たとへ^{直接}お目のかゝれないにしても、その後お見舞に上らなかつた

か、今となつて地団太踏んでも遅いのだ。
さきに吉江先生を失ひ、今また横光先生を喪ふ 自分の人生
に於て最大の二人の師はこれで二人とも亡くなられたのだ。
自分にはもう師とすべき人はなくなつた。自分は完全に支柱
を失つたのだ。しかも先生は自分にとつて単なる師ではなく、
最大の恩人であり、しかも生きる上に於ての良心であつた。
自分の行為を見守つてゐてくれるひと、そのひとの眼に見られ
ることによつて自身の行為に絶えず反省と鍛錬を加へられる
のであつた。

自分の倫理はまさしく横光先生から直接に与へられたいつていゝ。
自分の生きる力のもつとも大きな背景はまさしく師であつた
先生の存在に無限に自分は甘へ、文字通りもたれかゝつて、今日まで
やつて来たのだ。
そして、先生を師として持つことの出来た自分を自分の人生に於ての
最大の幸福として自認して来たのだ。
先生は自分にとつてはほとんど絶対だつた
年をとつていよいよ先生と親しくお話の出来ることを何よりの楽し
みとしてゐたのだつた。
先生は自分にとつて文学の師であるばかりでなく、実生活の上に於
ての師であつた。
自分がこゝまでどうやらやっ生きて来れたのはほんたうに先生のお
かげであつた。
先生の死は自分にとつて他の何人の死よりも打撃である
前に吉江先生のなくなられた時、自分は、自分の生きる興味の
半減するのを感じたが、横光先生の死は自分にとつて、自分の
生の支柱が取り払はれた感じがする。
もうあの美しい笑ひ顔を見ることは出来ぬ。
もうあの精神そのものといった感じのあの崇高な風貌に
肉眼で接することは出来ぬ
死といふものの絶対さは、実に、その人を肉眼で見る事が出来
ないといふ単純素朴なことにあるのだ
師よ、あなたの怠惰な弟子はその怠惰によってご病床に
参上いたさず居りましたその間に あなたは天界に召され
ました。何卒お許し下さいまし。
しかし、それにしても、もしあなたの弟子が面をおかしてあなたに
科学的な医療をもっと積極的にもっと誠意と熱情を以て
おすゝめいたしたならに恐らく師はそれをうけ入れて下され、しか
もそれによって師の御寿命はもっともつとおのびになられたこと、今
改めて思ふのです。この点に於てあなたの弟子は怠惰であり
ました。
師よ、しかしあなたはいつぞや微笑をもつて申されました
「ぼくは、もう、これで、いつ死んだつてい人間なんだからね」と
師よ、あなたは^{あな}あなたの人生に於て実に立派な仕事をなしと
げられました方です。その点に於てあなたは御自信をもつてこの

言葉を申されたことゝ存じます。
またその限りに於て、あなたの弟子はこの言葉を素直にうけとり
素直に承認いたしたのでありますた
師よ、もう何事も申し上げませぬ。

=====~~創造の魔神~~
=====~~不断の緊張と恐らく~~
=====~~が~~

乞ひ願はくは 安らかな休息に眠りたまへ 合掌

十二月三十一日(水)

午前九時半 横光先生宅にかけつける。

奥さまに御挨拶、涙のために言お悔やみの言葉出^てず。

「~~あの~~こんなことになる^てと知^つたら、あの時(過日木炭をもつて先生を
お見舞いした日)主人にお会はせして置く^んでしたのに」と奥さま
言はる。松村、大輪氏来て万端の世話をやいてみてくれた
林芙美子さんが来て居られた。
はじめ気がつか^なかったか奥さまと林さんのあるこの部屋に先生は眠^つて
居られるのだ^つた。
松村氏にそれを教へられて、二人で再び奥の間に入り、先生に対面
お顔をおほつた白布をとり、先生の唇に筆の先に水をふくませ
しめしてさし上げる。
先生のお顔すこし黄色味が出てゐるとは言え、生前の温顔とすこしも
変わらず、もの問へばまさに唇をひらいて答へられると思ふばかり
しばし永遠の別離を惜しむ。

× × (内方の
弔客続々と来る。松村、大輪、自分の三人なら世話役、連絡役、
交渉役となることに話をきめる。
会計は改造社の鈴木英大氏、受付も改造社のひとが引き受けて
くれることになる。
橋本栄吉氏—伊豆の大仁から、石塚友二氏 鎌倉からはせつけて
来る
夕刻、川端さん来られ、葬儀委員長をひきうけらる。

告別式は一月三日午後^前十一時よりと決定す。

夜、応接間に近いものだけ集まり川端さんと坊さんを囲んで
戒名の相談をする。

川端さん、故人の愛してゐた雨過山房からどうしても雨過といふ
字を使いたいと云はる。

石塚さん、雨過院釋文芸居士としようと言ふ。

川端さん 死んでからまでも文芸でいじめられては故人が可哀さうだ
とて反対。
結局、

光 文 院 釋 雨 過 居 士

と決定す。

~~正式の~~——

先生のデスマスクを岡本太郎氏スケッチす。

尚、毎日新聞社の好意にて、新創作派の彫刻家

本郷新氏にデスマスクをとつてもらふことになり。

弔問客のほとんど大部分が奥の間に入り、その作業をする
現場に立ち会ふ。

→作業約五十分に於て石膏のデスマスクの型出来上る

これはブロンズのものにすることにす。

納棺済みたる時、佐野繁次郎氏来り。棺の蓋をあげ

しやがみつゝ、故人の顔をスケッチする。

正式の通夜を一月二日午後六時から八時までとし、—乗物

の都合もあれば弔問者一同に引きとつて貰ふ。

午後十時、

橋本、松村、大輪、斉藤、八木、故先生の書齋にコタツを囲み

さまざまな思ひ出話をしつゝ通夜をする。

かくて今年最後の日も終りたり。

一月元旦(木) 快晴・暖

故先生の書斎の炬燵に足をつゝこみ、^{大晦日の}一夜を雑魚寝のまゝ明かしたり。

橋本さん、いつたん大仁へ帰る。

本日は元旦なれば流石に甲問客もなく閑散たり

山本三生、呉泰次郎、宅 孝二の三氏のみ。

夕食後、飾りつけを終れる仏間、寝棺の上に立てかけられた

故先生の写真を前に、奥さま、象造さん、佑典さんを囲んで

「家庭に於ける横光利一」の思ひ出話をきく。

奥さま「よそのひとは横光のことをコワイコワイと言ふけれども家の中では、オモシロオカシイことをよく言つては私共をしょつ中笑はせてゐる人でした。しかし戦争がはじまつてからはほとんど笑顔らしいものを見せたことがなく、~~私か~~~~不機嫌な顔ばかり~~ 私がどんな風にやつて居ても主人の不機嫌がなほらないので私も一体どうしたらよいか判らなくてどうしたらあなたの不機嫌がなほるんでせうときいたら、二十五年も夫婦になつてゐてまだ夫の心かわからないのかなアとさびしい顔をして言つてましたか」

また、食べものが気に入ると、突拍子もなく機嫌のよいことを家のものたち

にしゃべ^りてますが、それが気にいらないと 特におかずが、野菜ばかりの時 はじめから終りまで一言も口をきかず、食べ終ると黙つて書斎にプイと立つてしまふのでした

主人の好物は鳥と牛、それから油揚げをほうれん草といつしよに煮たもの

それから醤油だけはどんな時でも本物をつかはなければ承知し

ませんでした。いつだったが、本物がほんのちよつぴりだ^マ配給のおし

よう油をまぜて出したら、ひと口舌をつけてみて、すぐ、看破られてしまひたいへん叱られたことがあります」

象^三さん「ふだんのパパはちつともこわくなかつたけど、叱られる時

のパパはこわかつた」

佑典さん「ぼくは反対にふだんのパパはなんだかこわいひとだつた

けど、その代りいくら叱られてもちつともこわくはなかつた」

そして二人ともパパには一二度なぐられたといふ。

今夜も、松村、大輪、^{ママ}齊藤、八木の四人、書齋にて
雑魚寝することにす(先生の奥さまの妹さんの主人)
午前一時なり

一月二日(金) 快晴 暖

本夜の通夜に残る者を大体七八十人と見てその膳部の材料の
買ひ出しに松村、清水(燈社)八木の三人、菊池寛氏の好意
にて貸し与へられたる氏の自家用車にのりて、まず築地魚河岸の
中の青果市場に行く。

大根とねぎがあるばかりで外のかんじんな野菜かない。市場の人に事情を
話してたのんでみたか取締りかやかましくてどうにもならぬ断はられる。
止むを得ず途中の果物屋に入り、事情をはなしてたのんでみる。そこには
なかったがもってぬさうなところ紹介してくれ、そこへ行ってみる
その気ふのよささうなお内儀すっかり同情してくれて自家用の
にんじん、ごぼう、たけのこ、みつば、はすなど分けてくれる。
ついでに、僧侶におくるお菓子のことちよつと話してみたらこれまた
本願寺前の「きつね」(吉津祢)に電話をかけてくれる。
きつねに行く。こゝの女将またなかなか侠気ある女にて、これも自家
用にとつて置いた菓子を出してくれる。せんべい五箱と和菓子一箱
都合してもらう。こゝは築地小劇場関係の巢なる由にて久保田万太郎
滝沢修、杉村春子などしよつ中來ると女将の言なり

その他今夜の^{ママ}記念の言葉を書いてもらふべき稚状、その他文房
具など買つて帰る。(正月二日にてどこの店も休みなればなか
さがすのに苦心せり)

× × ×

午後六時より通夜、文壇、雑誌関係のほとんど大部分の
故人の知人 一室に会す。

もと、改造の編集長たりし水島治男氏と清水基吉、江口棒一 大いに
酔ひ、清水、江口の両君の言動、常軌を逸するものあり

今夜は川端先生夫妻、書齋にお泊りになられることになったので
自分たちはとなりの応接間に雑魚寝となる。

多田裕計 福井より、野々口薫 京都より、それぞれはせつけた。

一月三日(土) 快晴. 暖

本日は告別式なれば、朝からその準備に忙殺さる.

十時より読経開始

川端さんの弔辞、橋本さんの弔辞、すこしおくれて菊池寛氏の弔辞、それからずっとおくれて豊島与志雄氏の弔辞、来会者、恐らく五百名位か.

いよいよ出棺となりて、再び寝棺の蓋をあけ、奥さまは白い

蘭の花を、自分たちは^白菊、白いカーネーションなど白い花を

棺の中の先生のお体全面に投げ入れつゝ、いよいよ最後の別れを惜しむ. 涙が出てどうにもとまらぬ.

棺をかつぐものはえらばれて、橋本、石塚、松村、八木、森、大輪の六人なり. 弟子として最高の光栄なり.

柩車に従い自動車四台に分乗して、幡ヶ谷の火葬場に随伴す. 一時間にして、師は白骨となられたり.

理由の判らぬ怒り、ポツ然としてこみ上げ、制御に堪えず骨揚げ 遺族近親の他には、川端夫妻、橋本、八木、森、岡村(斉藤書店) 林芙美子

京都より上京せる野々口君を伴ひて帰る. 四日目なり.

一月四日(日) 晴.

今西君来訪、野々口君と三人 する古を食ベ夕方までぶっ通ししやべる.

三崎より元旦から来てみた秀子、猛、烈、邦子、母と共に帰る秀子よりお年玉として五百円もらう 恐縮なり.

邦子をはじめてみたが、初山 滋 画くところの童女に似て可愛いしこれなら悲観する必要なし

夕刻 今西君帰り 野々口君更に一泊す.

床に入つてまた野々口君と深更まで話す. 彼、東北あたりの清純な処女を嫁にもらひたしといふ. さきのあの love affair の反動ならんか.

一月五日(月) 晴

野々口君と有楽町ビューローに行き京都市の切符買ふを見送りて別る

さきに切符を買ひありし、毎日ホールの安川加寿子ピアノリサイタルをきく。

曲目は、フォーレ、ドビュツシー以後の近代及現代フランス作曲家の作品ばかりなり。

ドビュツシー もつとも美し。

久しぶりにて音楽をきゝ静かなる昂奮を感ず。

音楽といふものゝ在る間は生きるもまた愉し。

他は一切不純なり。

一月六日(火) 晴

入浴、

この数日間酒のみつゞけたれば痔再発、不快なり。

一月七日(水) 晴

招待を受け午後三時頃 松村泰太郎宅訪問

多田、阿部、横山等と共に新年の御馳走の饗応にあづかる
夜九時すぎまで話し辞去す

一月八日(木) 晴 (出すべき)

横光先生宅訪問 会葬者に礼状を書く。松村、大輪

青江(改造社)、海老池、横山の諸氏

象三さんと共に隣組及^{時岡} 近所に会葬御礼の挨拶

廻りす。

一月九日(金) 晴

朝十時より夜十一時まで机に座り通し、故先生の追悼文を書く。

十二枚、 慕情無限 と題す。

この追悼文、本年最初の仕事となれるはかなし。

一月十日(土) 晴

「改造文芸」社に追悼文をとゞける。同誌はその創刊号
全頁を挙げて「横光利一追悼号」とする由なればこゝに稟追悼
文をかきたるものなり。

他よりも二三その申込ありたるも一切断はることゝす。

追悼文は一つしか書けぬ筈のものなり。

出社、今年はじめての出社なり。

皆に「ひどくやつれた」と言はる。

岡枝君来社、例の家の件につき謝罪す。

帰途、西沢氏と茶をのみ同君の創作原稿あづかりて帰る。